

# 新宮市魅力発信女子部

## 女性が来たくなるまち 新宮市

新宮市魅力発信女子部 事務局 勢古口 千賀子



勢古口千賀子氏

新宮市に女性だけで地域の活性化に取り組んでいる団体があるという話を耳にして新宮市内の知人に尋ねると、市役所の勢古口さんに尋ねたらと教えていただき、早速、新宮市役所を訪ねました。  
勢古口千賀子さんは、商工観光課長をされておられお忙しい方ですが、事情を説明し執筆を依頼したところ、こころよく引き受けてくださいます、寄稿していただきました。

### はじめに

三重県と和歌山県の県境に位置する新宮市。大阪から電車で約4時間半、名古屋から約3時間半、東京からは約5時間半と、どこからとも遠いところです。

そんな新宮市ですが、和歌山県で和歌山市に次いで2番目、近畿でも8番目に市制施行した熊野の中心都

市。その昔から城下町、木材の集積地として栄え、最盛期には、まちなかを芸子が闊歩し、木材商の旦那衆が宴を広げるにぎやかな町でした。それが、船による流通に代わり道路が発展するにつれ、高速道路の通らない辺境の地となっていました。  
人口もピーク時の4万6000人から平成28年には3万人を割ってしまいました。しかしながら、熊野古道をはじめ、熊野速玉大社、神倉神社、阿須賀神社などの世界遺産や国史跡指定である新宮城跡のほか、文豪・佐藤春夫、文化学院を開設した西村伊作、中上健次など多くの文化人を排出する歴史と文化に彩られたまちです。

### 新宮市魅力発信女子部

その新宮市で発足した「新宮市魅力発信女子部」は、そのような新宮市の魅力を発掘し紹介する情報発信と地域の活性化に取り組みんでいます。新宮市が「女性が住みやすいまち」であり「女性が来たくなるまち新宮市」となることをPRし、将来の移住定住、関係人口の拡大につなげていきたいと考えています。

この取り組みを始める前に、平成26年度から女性職員4人で情報発信の一つとしてニュースレター「新宮通信SNG4」を発行しました。女性目線で、豊かな観光資源に恵まれる新宮市の魅力を紹介しようという取り組みなんでもです。旅行していろいろなおいしいものを食べたりおしゃれなお土産を買ったり、旅の決定権を握るといわれている女性。女性が行くところに男性も付いてくるのではないかと、定番とは違う女性からの情報発信をずっとやってみ

### 目次

新宮市魅力発信女子部 女性が来たくなるまち 新宮市 宮市魅力発信女子部 事務局 勢古口千賀子……	1
地域おこし協力隊から起業へ（前編） —協力隊を上手に使い和歌山を盛り上げる— 森 雄翼……	5
西日本豪雨災害の被災者支援ボランティア体験記 ボランティア活動@御坊市 御坊市職員労働組合 平見 寿英……	7

## わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所  
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号  
TEL・FAX 073-488-3127  
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2018年11月号



ワークショップ風景

いと思っていました。4人でそれぞれ自由に自分たちのお薦めスポットやお気に入りのものを紹介。それが日本広報協会の広報紙で取り上げられ、広報コンクルの企画部門で入選となりました。

たものが新宮市魅力発信女子部です。それでも、実現するまでにはいろいろなきとがあり、この企画は無理だと思ったこともありましたが、それが、ちょうど国の方針でも、女性が輝く社会をつくることを最重要課題とし「すべての女性が輝く政策パッケージ」を本部決定。女性が仲間を見つけて活動し支え合えるようなネットワークを支援すると記されおり、まさしく自分たちの考えていることと合致するものと企画を進めていったものです。

そして、国の地方創生事業の一つとして認めていただき「市民とつくる魅力発信事業」として事業開始しました。

決定してからも女子部の部員はまったくの無償ですから、公募したら皆申し込んでくれるのだろうか、興味を持って取り組んでくれるのだろうかと不安はありました。それが20〜40代までの平均年齢33歳の35人により取り組みをスタートできました。メンバーは市職

員のほか会社員、デザイナー、記者、主婦、議員などさまざま。

### 魅力的な新宮人

まず、初年度はウェブマガジン「新宮人」の作成に取り組みました。作成ワークショップでは「魅力的な新宮人」の情報を出しあい共有しあったほか「新宮の魅力・新宮の宝」となりそうな企画アイデア出しを行いました。若い女性ならではのアイデアが次々飛び出し大変盛り上がり、一般的な「会議」ではなく、どんな意見が出てアイデアを重ねていくという活発な意見交換の場でした。紹介する魅力的な新宮人も女性に特化し、約200件、40人の名が挙がりました。

そのなかから、女性商店主や観光ガイドなど約30人を取り上げました。メンバーは、ワークショップ以外にもチームごとにfacebookやカフェなどで熱心に打ち合わせを行い、同マガジンに掲載

する企画案も作り上げました。

そして魅力的な新宮女性のほか、とても楽しいチームによる企画と事務局による観光スポットの紹介をウェブマガジンに掲載することができました。同マガジンを見て、新しい素敵な出会いや新しい旅のスタイルを楽しむ人が増え「女性が来たくなるまち 新宮市」のPRにつなげればと考えています。

そのほか明治大学で開催した「熊野学フォーラム」で女子部メンバー2人が「新宮人」と「新宮市魅力発信女子部」のPRを実施しました。



市長、新宮人掲載女性と女子部メンバー

取り組みは地方紙をはじめ、中央紙、ラジオ、地元ケーブルテレビ、月刊広報で掲載。ネットメディアも21媒体に掲載いただきました。そのほか「新宮人」をもとに報道機関が掲載されている新宮女性を取材、中央紙などで報道するなどの派生効果も出ています。



新宮ピクニック

## アンケート結果から 事業化

2年目となる平成28年度は「住みやすいまち新宮市」をよりPRするために新宮市に在住または勤務女

性を対象とした「新宮女子『新宮に関するアンケート』」を行い、今後の事業展開の資料としました。

そして、日本初のクラウドファンディングサービス「READYFOR」を立ち上げ、日本人史上最年少でダボス会議に参加するなど幅広く活躍されている米良はるかさんのセミナーを開催。

アクションづくりワークショップとして、明治大学学術・社会連携部と協働し、同大学女子学生10人が新宮市を訪れ新宮女子とワークショップを開催しました。学生は、地域の魅力に触れるフィールドワークも行い、地元観光ガイドの案内によりレンタルサイクルで市内の世界遺産登録地などを巡り、「めはり寿司」づくり体験も行いました。

そして、ワークショップで作り上げた26のアクションアイデアのなかから事業化につながると思われるものを形にしていきました。新宮の新しいお土産となるメンバーのかわいいイラスト



東京ミッドタウン「地域×デザイン展」にて

ストとストーリーで市内観光施設を紹介する「新宮絵本箱」、I・Uターン施策の後押しにもなる新宮市で働く女性の仕事やライフスタイルを「靴」をモチーフにして紹介する「働く女性の靴図鑑」、新宮の名所名跡をお気に入りの文庫と一緒に持ち歩いてもらいたい「新宮に旅するブックカバー」、は「ハイヒールを履いて5cm上の目線から世の中を見ると、景色が変わる」「ハイヒールは、おしゃれ新宮女子のシンボル」というメンバーの気持ちと実現までの紆余曲折を乗り越えた熱意によって開催した「ハイヒールラン」。地

域活性化のためにもぜひとも会場として使いたいと商店街で開催し、当日は大勢の観客が集まり大盛況でした。

「自分たちが参加したいイベントを作りたい」との気持ちから、こだわりの抜いたイタリアンコースランチャやヨガ、キャンプなど、キャン

ドル創りなどのワークショップを楽しむと、ゴージャスな大人のピクニック『Singu Picnic』など。

そして、平成28年度も「熊野学フォーラム」で女子部の今年度事業の活動報告と「新宮市」をPRしました。

また、東京ミッドタウンでの「地域×デザイン展2017」まちが魅せるプロ



ハイヒールラン

「ジェクトー」に全国の自治体での関心の高い「地域における女性活躍の場の創出」の地方創生の事例として活動を発表。その内容は、雑誌「事業構想5月号」にも掲載されました。そのほか各方面からの協働企画も多数あり、イベント協働開催や、テレビ番組への女子部員の出演や雑誌などにもとりあげられました。



「ほっこりツアー」：神倉神社にて

## 「ほっこりツアー」と 「新宮城てっぺん スケッチツアー」

3年目となる平成29年度の取り組みは前年までの振り返りと今後の事業について、地元事業者とのワークショップを行い、新たな「新宮人」の発掘や市の魅

力を体験できる企画のアイデア発想を行いました。企画アイデア実践として、女性が楽しめるまちなか観光で参加者にほっこりしてもらおうという「ほっこりツアー」女子部協働開発オリジナル弁当「彩り今昔めはり箱」を作成した「新宮城てっぺんスケッチツアー」を開催。どちらも若い女性

ならではの企画であり、今後ファイドメニューとして定着させていこうと思っております。そのほか、引き続き協働企画として国行政機関や地元商工会議所、商店街、青年会議所などと事業に取り組みました。地元イベント「新宮の中心で愛を叫ぶ（丹鶴商店街編）」や女子部ブース出展のほか、市内高校での「これから求

める人材」についてのメンバーの講演、青年会議所主催イベントPRブース、テレビ出演などもありました。大阪市立大学とも同大学の「中山間スタディツアー」に協力、意見交換などを行いました。そして、メンバーが地域活性化団体を設立、メンバーの起業もありました。

### 地域の女性が輝けば、 男性も輝く

平成30年度も地元参加者とのワークショップを行い、新宮港に入港するクルーズ船乗客へのオリジナルツアーやイベントテストなどを行っています。

このように、メンバーは、自分たちのスキルや行動力、想像力を地域活性のために無償で提供してくれているのです。

実際にこれまでの成果として  
・市内の民間業者と協働して取り組みを進めることができた。  
・商品を試作販売して新た

な市場創造に向けて取り組みを進めている。情報発信により新宮のファンを獲得、観光客の誘致とともに移住定住促進にも将来的にはつながるものと思われる。

一般女性が事業者と係わることで支援者を得ること、事業者にとっては新しい発想から事業への新たな意欲の触発につながっている。

メンバー間、メンバーと商店街や地域団体など多くの団体との新たな取り組みも生まれている。ネットワークの拡大により、それぞれのやりたいことの事業実現の可能性を広げている。

多くのメディアにとりあげてもらったことで、他の行政からの関心も高く交流の幅も広がっている。などが挙げられます。

女子部をきっかけとして、県内でも若年女性を中心とした情報発信に主眼を置いた「女子部」がたくさん生まれてきています。そのさきがけとなったことも、新

宮市魅力発信女子部を評価していただいたことのひとつであると自負しております。

今後、このプロジェクトがそれぞれの分野で頑張っている女性たちのネットワークにつながり、関係者と連携することで、新宮に住む、働く女性がやりたいことができる、幸せの満足度の高いまちとして、女子部のメンバーがそのモデルとなり、定住・移住者を牽引してくれることを期待しています

新宮市魅力発信女子部の活動を通じて得た何よりも大きな成果は、市内の民間企業、市民と協働で、みなで一丸となって地域活性化に取り組めたことだと思います。

地域の女性が輝けば、男性も輝く。仕事も子育てもしやすい、女性が幸せなまち。自分たちの「やりたいこと」が実現できる。そんなまちづくりを目指して、今後も活動していきたいと思っております。

# 地域おこし協力隊から起業へ(後編) —協力隊を上手に使い和歌山を盛り上げる—

森 雄 翼



森雄翼氏

今回の記事は、一〇月号で掲載した9月1日の当研究所総会で行われた森雄翼氏の講演会の後半分を掲載します。  
(文責・西岡)

## 協力隊の上手な使い方

いろんな協力隊の方々との意見交換してきて、新しい町で0から1をつくるのってかなり難しいというのと、曖昧な募集で来た人は何をしたらいいかわからないし、担当の人も何をさせていいのかわからないので、取りあえず地域の活性化チームに入ってくれみたいなやり方のところが結構あるんです。

県内のある市では、すごい問題が起きました。その方は、民間の大企業でバリバリやってた方で、地域をおこしたい、ノウハウもありますという感じで来たんですけれども、行政はそのスピード感についていけない

というか、そのスピード感で行ったら問題が起きるだろうって、待ったをかけたって、結局やめることになったんです。そのときに、その待った待ったのやりとりが文書で残っていたので、それがネットですらされて大炎上するということがありました。中途半端に募集すると、こういう事態になるといえるがあるんですよ。なので、一番いいやり方は、0から1を行政側で用意して、1から10は、ある程度の自由を協力隊に与えないとうまくやっていけないと思うんです。

島根県川本町の取り組みの内容なんですけど、商店街のビル1棟を使って、ビジネスプランを提出してもらい、それをコンテスト形式で採用された人を協力隊として受け入れますというふうにしたんです。その募集の仕方が一番いいなと思います。逆に不明瞭だと、あいつ何やってるのか



島根県の事例

分らない。私はこれが見たいのにやらせてもらえない、入ってみたいら何か話が違うという事態になっちゃうんですよね。熊野川の事例に当てはめてみると、熊野川には、地域活性化チームがあつて、皆さん、定年退職された60代、70代のまだまだ元気な方々が、米づくりをやってます。でも耕作放棄地が増えてきていて、そこに花を咲かせようと頑張っています。ただ、花を咲かせて終わりなんですよね。なので、ここに協力隊をどう絡めるかと考えたときに、その活性化チームのお手伝いをしてくださいと、募集は駄目なんですよ。地域で頑張っているその成果物を加工してくださいとか、それで何か事業をしてくださいという募集のやり方が、僕は正解だと思うんです。

岡山県の六島の事例なんですけれども、この方は、大阪でずっと福祉のことをやってた30代の方で、農業とか醸造とかはやったことない方なんですけれども、地域の方々からソバをつくってるとか、麦をつくってるとか、自分はそのでビールをつくるということとで起業したんです。全国でちょっとした醸造所が増えてきて、クラフトビールブームが来ています。彼も岡山のちっちゃなビール工場に弟子入りして、つくり方を習って、自分で工房を構えて、六島のソバとか麦でビールを開発しています。まだ酒販免許は持っていないので全国販売はしてないんですけど、樽でジョッキに入れて販売するのはオツケーなので、飲食店とか、フェスとかに出店しているみたいです。こういう地域の産物をビールに結び付けるみたいな二次産業、三次産業が協力隊の得意分野なんです。地域の人の得意分野(一次産業)と協力隊の得意分野をうまくミックスさせて、

成果物を面白いものに昇華させるような使い方がいいのかなと思います。地域の人だけで頑張ってるけど、広がらないでくすぶっている地域活動に、ガンソリン役として協力隊を導入したらいいのかなというふうに思います。

協力隊というのは、3年という期間が決められていて、3年後は独立しないと決まらなくて、最初から焦らざるを得ない状況で来ているので、起業、事業化というのは早いうちにしたいんですよ。なので、地域の中に既にある産業と何か新しい事業を絡めて、協力隊を導入してやってもらうというのが一番いいやり方かなと思います。

### 和歌山を盛り上げるために

全国で見ても和歌山県の協力隊ってうまくいってないんですよ。「和歌山 協力隊 募集」って検索して、最初に出たのが「協力隊に応募ゼロ 古座川町」という記事が出てきて、古座川町がどうい募集をしているかと言ったら、観光協会

の事務員として募集をかけた。よくあるパターンなんですけども、これでは絶対応募来ないですよ。

協力隊というのは、好きなことをやるために田舎に行くわけです。なのに、正社員よりも安い値段で、普通にサラリーマンと同じように働かされるのは、全然クリエイティブではないので、これにはいい人材が集まらない。北山村でも同じような募集があるみたいで、ネット上で「こんなに行くわけねえよな」と話題になっていました。

僕の場合は、ゲストハウスを立ち上げるとか、自分の事業を起こすのに、3年間という時間と1200万円(3年間の給与と活動費)というお金を全部、自分の活動に使っていいというの、やりたいことやって、かつお金までもらえるってすごいおいしい話だと思っています。安月給で普通にサラリーマンと同じように働かされるのとは真逆で、好きなことやってお金もらっていいんですかみたいな感じだと人は来るんですよ。ある程度の自由度

を見せてあげるといのが大事なことかなと思います。募集が下手だと本当にいい人材が集まらないです。

解決方法としては、中間コーディネーターをちゃんとしたところをお願いして、導入後のサポートももちろん中間コーディネーターがいるとスムーズではあるんですけど、どうやって募集をしたらいいのか、地域の課題は何なのか、それを一緒に考えるパートナーを活用して、募集内容を民間の企業に入れて一緒に考えた方がいいんじゃないかというの、僕の和歌山の協力隊を盛り上げる答えです。

鳥取は、鳥取県内すべての地域で、中間コーディネーター(NPO法人学生人材バンク代表理事)の中川玄洋さんが入って、協力隊導入前の募集のコンサルとか導入後のお世話もやってまして、全国の中でもうまくいっていると言われている。和歌山県内には、15地域で40人ぐらい協力隊が入っています。1地域、年間200万円の協力隊募集の広告予算が付いているんです。

NPO 法人学生人材バンク  
代表理事 中川 玄洋



中間コーディネーターの  
中川玄洋氏

でも、和歌山県はほとんどの地域で使っていません。三重県はエティックという人材発掘のNPOと提携して、いい人材を引っ張ってきています。それは募集というよりも一本釣りです。和歌山県はそれのお金を勝浦で1回使っただけです。だからそういう予算を使って、こういう団体に募集を代行してもらおうかなという方がいいんじゃないかなと考えます。

まとめです。協力隊は担当職員が上手にお世話して地域に溶け込ませてあげるべし。僕の場合は自分の足で各地域を回って、区長さんとお話して、自分から飛び込んでいったんですけど、その手間を何かうまく行政の人がつないでくれたら、もっとスムーズだったのかなとは思っています。

募集内容は0から1を行

政が準備して、1から10を協力隊にお願いする。それはかなり自由度を与えた状態でやってもらうのが一番いい募集の仕方。

事前に地域からの要望をヒアリングすべし。募集にはクリエイティブ要素を大事にすべし。

地域おこし協力隊は二次産業、三次産業が得意で、地域の人は一次産業が得意なので、そこをうまくかけあわせた募集の仕方をする。下手な募集には、いい人材は集まらないと心得るべし。

中間コーディネーターを導入したり、採用方法だけでもクリエイティブな業者に委託すべし。これだけで全然違うと思います。

以上が協力隊を3年間やった感想と、次に生かしてほしいなと思う考察です。ありがとうございました。

# 西日本豪雨災害の 被災者支援ボランティア体験記 ボランティア活動@御坊市

御坊市職員労働組合 平見寿英



平見寿英氏

今年は、大阪北部地震をはじめ、西日本豪雨や台風(21号・24号)、北海道地震など天災が続いています。今回は7月6日に発生した西日本豪雨災害のボランティア活動に8月18日に参加した御坊市職員労働組合の平見寿英氏の体験報告を掲載します。

ボランティアにはどこか美しいもの、良いものという印象が強い方が多いと思われるので(私もそうだった)今回の体験記ではできるだけありのまま感じたま書くことにしました。

## ボランティア募集

平成30年7月6日、気象庁は北九州、中国地方西部に大雨特別警報を発表した。死者は200人を超えており、平成に入ってから最も大きな被害を出した豪雨災害となった(BBC:2018/7/10)とのことである。その大災害発生からお

よそ1ヶ月を過ぎた頃、和歌山県自治労連本部より災害ボランティア参加の要請が届いたため応募することにした。

朝の9時に間に合うようにホテルから神戸ハーバーランドまで車で向かい、そこでボランティアの受付を行った。そこで5人1組チームとなり、一日このチームでボランティアを行うのだそうだ。この日ハーバーランドに集まったボランティアは200〜300人くらいだった気がする。災害が起こった日からだいたい一ヶ月と少しといったところであった。

## 被災地の状況

バスで揺られること30分。山間部に近づくにつれ道路に土埃が目立ちはじめ、今回の災害の様子が分かってきた。本来ならばこの時期

であれば田んぼは青々としているのだが、本来の稲がなく茶色い土だけの空間になっていた。おそらく決壊した堤防から流れ出た土砂で稲が埋もれてしまったのだ。そこからだんだんと家屋にも違和感が出始めた。多くの家の1階の窓が全開にあけ放たれ、家の中が丸見えになっていた。家財はすでに外に運びだされて家の中はがらんどうになっているのがよく見えた。現場に向かう道路と平行して走る鉄道の高架下にはすでに瓦礫が延々と山積みになっていた。今走っているこの道も、ほんの少し前までは瓦礫で埋まっていたのだろう。現場に近づくにつれて被害が大きくなっているのがよく分かった。水に浸かった部分は変色しているのだが、その変色が2階の屋根まで届いている。それぞ

れの家の住人たちは無事だったのだろうかと思われ、バスを思い浮かべていると、バスは大きな橋にかかっていた。大きな橋であったが、その下に流れている川は水位も低く、チロチロと流れている程度に見えた。この川が今回氾濫した川であった。災害前も、普段はこんなふうになさやかに流れる川だったのだろう。

## いざボランティア活動へ

バスを降りて2、3分のところに仮設テントで作られたボランティア基地があった。基地に到着したときには10時45分くらいになっていたと思う。帰りのバスは13時15分とのこと。ボラ



片付け作業中の様子

ンティア基地では仕事のマッチングが行われていた。受けた仕事は5人1組として何組必要となるかが判定され、それに応じて現地に到着したボランティアに仕事を振っていた。私たちの組に振られた仕事は家財を家の外に出すというものであったが、依頼が大雑把であったため詳しく聴き直すとは担当の方も困惑し、依頼人に電話したが繋がらなかったため、結局別の現場に向かうことになった。聞けば担当の方もボランティアなんだそうで、詳しいことはよく分かっていないよう

であった。新しい仕事も家財を外に出すというものであった。ボランティアの基地には一通りの道具が揃っており、スコップやらバールやらはそこですべて調達することができた。マッチングやらチームへの説明やら準備で、出発まで30分程度を要した。住所は聞いているが地図上でドコというのには分からないので各組で GoogleMap を使って自分で調べて欲しいとのことであった。Map で調べた道を進んでいると、地図にある道が滑落してなくなっていたりしてびっくりした。15分ほどで現場に着いたが誰もいないので本当にこの家で合っているのかわからなかった。依頼人の方に電話をして聞いてみるも、しばらく家に帰っていないので現場のことはわからない。〇〇さんという人に任せてあるので、その人に聞いてくださいということであった。しばらくするとその方が現れ、この方もボランティアだそうで、このあたりの地域を任せ

ているとのことであったが、結局一つ一つの家の進行状況まで把握しているものではない様子だった。家の奥の物置となっていた部分の手付かずになっていた。その部分に着手することにした。まだ水が残っている部分があり、腐った食料のようなものもまだ残されてひどい悪臭を放っていた。物置に横倒しになっていた食器棚をバールで解体したり、冷蔵庫を運び出したり、1時間程度の作業で物置の1区画を空っぽにすることができた。この時点で12時30分くらいになっていた。で、作業を終了することにした。基地に帰って、今日の作業と次回必要な作業について報告を行い、バスの時間になるまで被災地の様子を見て回ったりしていた。

### 被災地は住民不在

改めて見て回ると私達ボランティアの人と工事関係者しかこの町には居ない様子だった。フリーマーケットという形で支援物資が空き店舗に置かれていたが、人はなく物だけが残り機能していない様子であった。前述した通り店はどこも開いておらず、とても生活できる環境ではない。私達が作業した家の方も、今は親戚の家に避難していることを後から聞いた。ボランティアに参加した当時は、被災した際の体験が聞けると期待していたが、よくよく考えれば、水も電気もなく、買い物もできない場所です。1ヶ月も住むというのは現実的ではないだろう。

そんなことが身にしみてよくわかったのも、恥ずかしながら今年の台風21号の被害で私の家も1日停電になってしまったからである。電気のない夜というのは不安なもので、テレビも見えず通信手段も限られ、冷蔵庫の中身の心配があり、たったの1日だけでもストレスの強いものであった。これが1ヶ月ともなるととても耐えられるようには思えない。ボランティアの解散が14時であった。和歌山から岡山まで移動し、1泊して

### ボランティアを終えて

被災地を見て、自分も被災して、分かったこともあつた。まだまだ分からないこともたくさんあります。今後もいろいろと体験し考えていきたいと思います。ボランティアを終えたあとは、観光客になりきってたくさんのお土産を買いたくことにしました。これも現地にお金を落とすことになるだろうと考えてのことです。買いこんだお土産を職場や組合のみんなに配っている、たくさんの方が被災地のことを聞いてくれました。被災地へのカンパや自分たちの防災意識が強まってくれば、今回ボランティアに参加した意味もあつたのかなと思います。この体験記を読んでくれた方にもなんらかの影響が与えられたなら幸いです。